

原始社会と社会的神話

ケ
メ
ン
ズ
・
マ
ド
ッ
ク

(以下の論文はオウクランド大学のケンズ・マドックが昨夏、ウイリン

グトンの「世界事変委員会」で述べた講演の全訳である)

(一)

私は、アナキストや共産主義著述家達が描く未来社会と、実在している原始社会の性質と
の間の関係をここで論究したいと思う。そうすることで、考古学者や理想主義者達が「秩序
あるアナキイ」とか、又はコンミニズムとかいう言葉で紹介した原始社会生活の意味を、
より精細につかむことになるだろう。そして私の前提は、△無政府▽か△共産▽か、そのう
ち一つの社会だけが、かかる原始社会にのみその姿を現わしているという点にある。

アメリカの考古学者L・ホワイ特が強調しているように、人類史上で自由、平等、友愛が
実現されていたのは、実に原始社会だけである。われわれは文明へ一歩ふみこむとすぐ、自
由、平等、友愛から一歩後退したのだ。それ故に、「能力に応じて各人が、必要に応じて各

人へ」という原理に基づいた社会への案内や、国家の衰退について語る時、アナキストやコンミニスト著述家達は、その社会的存在の形を未来の中で考案し、そしてそれに似たものを、ただ過去の社会存在に近似させて語ることとなった。ここでの過去という言葉は、年代的な過去よりは、むしろ社会的、文化的な意味である。というのは歴史時代においても、原始社会は文明の興隆を軽蔑し、今日もなお依然として存在して、その立場を主張しているからである。

その原始社会から、国家の衰退や「能力に応じて各人から、必要に応じて各人へ」という原理に基づいた社会へ、もっとずっと深くまで諸君を導いていこうというのは、急進論者達や革命家達にとって、それらが社会的神話として、もっと重視さるべき筈だということを提案するつもりだからである。そして社会的神話とは、ある未来時に生活がどのようなかを予言する一つの主張ではなくて、現在の社会の一層実り多き批判であり、さらに現実の行動への拍車となるものだからである。そこで私はいま、無政府的又は共産的なと云われる原始社会の姿を改めてみ直さねばならない。またそれらがどうして無政府的であり、どういふふうに共産的であるか。そして私の原始社会というのはどういう意味であるか、を明らかにしなければならない。

ある社会を原始として格付けする時、考古学者達は、文盲、単純な技術、狭い土地、専門化の欠除、そして社会関係の決定要素として、血縁の重視などの性格を心に浮べる。一定の

社会が強く書写の訓練を鼓舞したのはなぜか。彼らが専門化を欠いているのはなぜか、これらの性格を説明する有用な方法の一つは、エネルギーの概念を導入することである。社会は人々が各人ごとに少量のエネルギーのみに縛りつけられている時、原始的である。動物の飼育や植物の栽培は各人のエネルギーの量の増大を通じて、原始から文明へ移りゆくための基礎となる。この結果として社会は余分な生産物↓専門化↓人口増大、支配と従属の階級、つまり、都市、国民、帝国を抱えこむことになる。すなわち農業革命である。

しかし原始から文明生活への変遷は、自由、平等、友愛が実現され、又は近似化されている社会から、これらの価値が薄められ不在にされた社会への変遷でもある。たしかに、原始社会では利用されているエネルギーの量は低い。だが彼らの生活の特長は必然的に、無政府的な又は共産的な多くの性格を帯びている。

原始人の無政府主義的な生活を記述するに当って、私はオックスフォード大学の考古学者エバンズ・プリチャードによって研究された、南スウダンに住む牧歌的な人達―驚くほど無政府的なニューア族から始めるよりほかに良い方法を持たない。彼らは全く文字通りに法律なく政府のない「秩序ある無政府」(E・プリチャード)の社会に住んでいる。

法律なく政府もなく、彼らの社会組織はどのようなになっているか、ニューア族は部族にわかれている。しかもそれぞれの部族は事情によってより小さく分節し、しかもより小さな班まで分節する。かくしてルウ部族は分節してモウ族やガン族に、さらに分節して第一の単位

である班になる。ガンは、ルムヨウク及びガセルに分節して第二の班となる。ガセルは、レグ及びナイヤクワスに分節して地方区の班となる。この地方区の班は順次に分節し、村落コンミニチイになる。最も小さい政治的単位であるルウやナイヤクワス地区班が、ニューア族の基本的なものである。あらゆる部族は、私が記述したルウ族のような方法で分節する各部族の班はその部族それ自身の性格をそれぞれ持っている。かくて分節は、どの分節でも名前を持っている部族に匹敵して、共通の意見をそそぎこまれ、その地方区と共同し、分節組織の中においてその地位を自覚している。

この分節的な政治組織から出た枝葉は、氏や血統の近親組織をなしている。そしてそれらも又分節組織で統一されている。というのは政治的分節のそれぞれの秩序は、近親的分節の秩序とつりあっているからである。實際上この二つの組織は分割できない。氏族と分節的血族とは、部族や分節的班と似ており、持っている名前においても、共通の意見や地区での協力や、全体として組織の位置の自覚においても、全く似ているからである。一つの部族の中には一つ以上の氏族があり、その故に一組以上の血族が存在するが、ニューア族は一つの氏族とその血族を優れたものとみる。それはその部族や班と協力している氏族やその血族のことである。つけ加えておかねばならないのは、この「優れた」ということは、ニューア族にとつてどのような支配と従属との関係も含まない。

ニューア族はその独特な名前によるのみでなく、他の二つの特徴によっても定義される。そ

の一つは、領有地が争いのもととなるほど単位が大きく、又殺人や他の不法行為のためには賠償が払われることである。もう一つは、戦争を行うには余りその単位が小さいことである。簡単に云えば、部族内部での論争は正当な復讐や血の値いを払っておさめられ、外部との論争は、戦いによってのみ片付けられることを意味している。

私は、この無政府的な社会組織を基礎づけている一構成的なくつかの原理を、スケッチした。その部族社会は、どのように結合しているか。その組織は分節的であるから、その諸部分の間には反対と同盟との平均が、結果としていつも判っている。かくて一つの部族の内部にある二つの村コンミニチイの一つが、必要のため別の地区の班の村によりつくとする。それは同じ地区の班が反対するかも知れない。そのために、もし危険がおこり威嚇されるなら、新しい結合は共に連合して同盟する。分離と結合との終ることのないこの過程は、すべての分節の水平面上に生起する。ある場合には諸部分がお互いに並び立ち、他の場合には提携するということは、全体としては素晴らしい統一の絆となるものである。

部族は又部族間の分節を横に切る近縁の絆で統一されている。氏族は族外婚であって、男は他の氏族から妻を嫁取らねばならない。これはその男に、自分の氏族よりも他の氏族を親しみ深いものとする。しかも、他の村や班に親威の出現することは、部族の内部の各分節間の敵対関係の発展を大いにやわらげる。なおそれ以上に、彼らは近接した地帯に住み、たがいに協同している政治的班に住んでいる。このことが又敵対を禁じるのである。実際、E・

ブリチャアドはこれらの横断的な近縁関係を、一人の男が他の者を害する時期をうまく引きのはず弾力のある帯にたとえている。しかし結局は、相反する分節は共に引きつけ合うのだ。祭の信仰は、統合に関するもう一つのメカニズムである。血の反目をもつ仲間同士の者は一語に食ったり飲んだりすることはできない。すなわち社会関係は切断されている。それゆえ信仰は、敵を探す代りに賠償に応ずるように、反目を押えて不和を治すためのもう一つの動因となる。

最後に、われわれはニューア族の生態を告げねばならない。彼らは牧歌的な人種である。いつも乾燥期には奥地の自分達の村から、河や水のある場所へ移住する。彼らは、同じ部族であろうとなかろうと、他の色々なニューア達の部落を横切らねばならない。平和を守るためには、少くともある程度までは、生態学的な状態によって負わせられた動因があるのである。

(二)

「ニューア族の間の政府機関の欠除、法律制度や指導精神の不在、一般的にいつて組織された政治生活の不在は著しいものがある。彼らが生活している秩序ある無政府社会は、彼らの性格と一致している。というのは、ニューア族達の間では、支配者達の嚇しは通用しないから

である。」

「ニューア族は激しい平等主義の育ての親であり、心の底までデモクラットである。しかもたやすく暴力にかりたてられる。その不穏な精神は、いかなる抑圧もいやになってしまふ。そして、自分らより優れたものを認めない。富も生まれも、相違をつくらない。」

「どのニューア達もその行動において、自分達が隣人と同様に善良だと、心から考えていることがその証拠である。彼らは大地のぬしであるかのごとく気負って歩く。実際、彼らは自分自身を大地そのものであると考えている。彼らの社会には主人も召使もない。神の高貴な創造物だと自から考えている。平等だけが敵存する。彼らの間では、ある秩序に対する疑惑さえも人々を怒らす。しかも彼が実行しなかったり、あてにならないようなぐずぐずした態度でそれを行うなら、拒絶よりもむしろ侮辱と考える。」(E.ブリチャアド)

ニューア族は、その社会組織が自分達とは違っている政治的な隣人達との間の、精神の相違を自覚している。一人のニューアがE・ブリチャアドにシラク族について語る。「彼らは一人の大酋長を持つ、しかし、われわれは持たない。この大酋長は一人の男を呼びつけて乳牛を要求することができる。又男の喉をかき切ることもできる。そんなことをニューア族のものは一人もみることがない。誰かが人を呼びつけたり乳牛を要求したりする時、ニューア族ならどんなことが起きるか。」(E・ブリチャアド) ニュア族からシラク族へ移る時、われわれは原始アナキイから、奴隷的国家へ移行することになる。

さてここで私はいまなお無政府的存在であるけれども、ボルネオのサラワリ地区のランド・ダイヤクス族という全く違った社会組織を持った人達を記述したいと思う。ニューア族のようにダイヤクスは村々に住む。しかしニューア族とは違って、彼らは分節的社会組織を欠き、村々はだんだん大きな単位にふくれあがった場合、その上で統一されている。その代りに、村々は経済的にも政治的にも又祭儀的にも自治権を持っている。けれども、一度定住地を離れたうえの、隣村との結びつきは制限されている。

めいめいの村は、ランド・ダイヤクス族によって値打ちありと認められたようなものを所有しているために選ばれた、酋長を持っている。彼の権力は非常に制限的である。実際酋長というものは、前植民地時代には全く存在していなかったかもしれない。彼は確かに村を支配していない。

「われわれは今、無政府社会ではなくても民主主義の社会を取り扱っていることを記憶していてもいい。村の小さい子供は、もし自分が誤りをしたと考えるなら、ためらいなく酋長のところへ告げにゆくが、村の集まりで自分と同輩の若者のそばでは、批判はしばしば卒直に述べる。彼は村の最も貧乏な人たちのように自分の利益のために働くが、上位の者の尊敬を支持するのようなくわだても嘲笑されるのが常である。」(W・R・ケディズ)この章を読んだ時私は、校長を含めてスタッフと子供達の間の関係について、A・S・ニールの有名なサマーヒルの学校のことを思い出す。その学校生活の中では、どのような騒しや又

如何なる権威的な性格も目立ちはない。

「だれでも人はある程度首領である。首領をも含めて他の人々になすべきことについてさし指し示す。しかし彼らは、その人が何かの場合にそれをなすつもりであることを述べるか、それをなすことを一層喜んでいることを示さない限り、かような命令は、しっぺ返しとしてしか受け取らない。」(W・R・ケディズ)

ニューア族は猛烈な個人主義者である。ランド・ダイヤクス族はおとなしい個人主義者で、内気で平和好きで、彼らの間では暴力的行為は非常に稀である。では、どうして争いをおさめるか。これには三つの方法がある。まず第一に、犯された方が自分で罰金を決めて加害者にそれを課する。かような罰金は常に払われる。もしこの愉快で簡単で調和した方法が実行されない時には、事件は酋長へ持ち込まれる。彼は顧問会を開いて、二、三の長老や事件の関係者達と一諸にその席につく。その訴訟は全く形式ばらないのでむしろ公開討論に似ている。酋長は陳述された意見の大意によって、その審判の指針をする。そして罪を決める時にのみ、彼は多くの個人的イニシヤを示す。けれどもこの時でさえも、他の人達の意見を考慮している。第二の方法は、この村の酋長よりもっと高くにいる権威者のところへ持ち込むことである。しかしこれはまれにしか起らない。

ニューア族の場合には、自分のことに関する限り、暴力が脅しにたよる。ランド・ダイヤクス族は暴力を是認しない代りに、悪魔による罪の恐れがある。そして一般の尊敬を失うこと

から起る恥じがある。しかもかれらはこの恥じを、他人が自分のした行為に気がつき、その行為を無価値なものとみていることを知った時、恥じとして経験する。これがすべての中で最も強力な処罰である。そしてこの恥じは、加害者を共同の自治体から追放するかもしれないのである。最後に、悪魔は罪を荷っている者達が罪を受けない場合には罰するという信念がある。かくてもし加害者が罰金を課せられても払わない時には、罪を犯した者は悪魔の迫害の危険にさらされることになる。加害者は最も強力な一般の不承認にさらされる。というのは、デモンの迫害は本源的なものだからである。

ニューア族とランド・ダイアクス族に關する私の記述から、彼らは實際に無政府的な生活をしていないにしても、社会的存在としてできるだけそれに近い生活をしていることをみられたと思う。しかも、かかるアナキイな生活方法は、原始的世界では広くゆきわたっているのである。エネルギーの利用量が極めて低い処ではどこでも、その社会の集権化や階層化は大きくならないのである。

E・プリチャードの創った「秩序あるアナキイ」という言葉は、研究者達の間では、全く常識となったと私は思う。だが同じことを表現する原始共產主義という言葉の使用には何か危険なものがある。理由は極めて簡単で、原始共產主義という言葉はしごくあいまいであることである。コンミュニズムとは、凡てのものを凡ての人々に、を意味する。それは感情的な底意を持ちしかも誤解に導きがちであり、民族と家族と個人とそして、凡ての原始社

会に見出されるその他の諸権利との網状組織をばやけさすからである。

もちろんこれらの批判は見落しがあるけれども、原始と文明社会との間には質的な相違がある。後者に比べて前者には、むしろ共同の発展と社会的な相互援助とそして、経済生活の享受が性格づけられる。グループの各員は自然資源に近づく自由を楽しんでいる。そして社会は敵対的な階級に分割されていない。

原始共產主義の提議者達の注意を引いていたものはこの種の性質である。彼らの最上の者も、グループの存在や個人の権利を決して否定しない。実際、共產主義ではグループや個人の収益をどのように処理すべきかがわからない。原始社会における社会的経済的な基礎的原理は、互恵主義的なものである。この互恵主義によって現在利益を享けている人々は、後日必ず等価のお返しをする義務がある。どうしてそれは共產主義と調和しないのか。私はそれはどのような相互扶助の組織とも分離せしめられているからだといいたい。勿論、「相互扶助」はクロボトキンの最も有名な本の名前である。しかもこの言葉がいかに屢々考古学者達の専攻論文の中に不意に現われているかを告げることは興味のあることである。クロボトキンは少しもその言葉を口に出さなかったけれども。

少くとも原始共產主義に対するこの考え方に反対する者達は、別の地盤に立っている。エンゲルスは彼の「家族、私有財産、国家の起源」を、H・モルガンからの引用で埋め、共產主義思想家達はこれで武装している。マルキスト達が守っている独断的毒舌的な精神と共に

確かに他の点からは有用でもあるこの武装は、多分マルキストをマルキストたらしむる刺戟とはならないだろう。われわれはX・ホワイトのように「相互扶助は私有財産をこの世界で守るためになされたくわだてのようにみたい」と述べたてる、エンゲルスの概念に反対する者を、批判する存在を忘れているわけではないが！。

(三)

そこで私は今やニュー族とランド・ダイヤクス族の経済の概念を急いでみてゆきたい。それぞれニュー部族達やその班は、自分自身の牧場と、その各員が自由に利用する水の供給所を持っている。ニュー族の誇りである家畜はその家族で飼育している。しかもその世帯主が死ぬまでは、彼が自由に処分する権利を持っている。しかし彼の妻はその使用権を享有する。息子達は自分の結婚の費用のためにそれらの家畜に対して権利を持っている。娘が結婚する時には、彼女が受け取る家畜は広く血縁の各員に分配される。小さい班の仲間達は共同で放牧する。というのは個々の世帯が余り小さいので、個々ではその家畜群を保護したり世話したりすることができないからである。ニュー族は又黍や粟を作っているが、土地の保存権のいざこざは決して起らない。土地は皆のものだからである。誰も他の者が使用していな

ければ、人は自分の家のうしろの地面を耕してよい。村の外側の使用されていない土地は自由に皆に利用される。

各々のニュー族の世帯はそれなりの食物を持っているが、彼らの家は別々の家で食事するにはたいそう広いので、実際はそのコミュニティは共通の供給を分けあっている。分配のルールと歓待の精神がいきわたっているので、肉や魚は広く配分され、安全に利用されている。ニュー族といえども、食糧の不足に苦しむ時があるが、それはより開化した共同体の中でいつも起るように、飢えや飽食の結果ではなく、各人が飢えに備えて保証されているから、平等に分配する物は分配してしまうことから起るのである。E・ブリチャードがいうように「今日、必要とする人は、明日、必要になるかもしれない人から助けを享ける」のがニュー族の習慣である。

ランド・ダイヤクス族にも又、土地の不足はない。誰でも水田を設けるためにジャングルを開拓してよい。一方、畑を開拓することはお盛んである。彼は個人的保有権を享受しているが、死んだ後では、彼の権利はすべてその子孫へわたる。幸せにも、人々は自分の要求権を大部分忘れがちである。もしこの規定がないならば大変なことになるだろう。祖先の人によって開拓された畑を、人はどのようにして使用しようとするのか。権利を譲られた人が反対しないならば、その人はその畑を自由に使う。もし、誰かが反対するならば、その時、誰が最上の権利を持つかを決定するための、二つの簡単な規則がある。第一に、最初の使用

権の規約は、最近にその土地を最初に使用した要求者がその土地の権利を持つ。第二には、共に最後にその土地を使用した人の子孫である時、より年長の者がその使用権を持つ。この規約は、最初の規約の延長と解される。というのはその人が他の要求権者の血族であれば、より年長であればあるだけ、その人が死ぬ前にその土地を耕す機会には、益々少なくなるからである。

ランド・ダイアクス族は私が先に述べたように、互惠主義に基づく複雑な労働交換組織により、そのグループを補充して、その土地で働いている。畑で働く時には、友達や近縁者や近所の人達を探す。そして各人は畑に入り、支払いを受けて一日の労働を果す義務を負う。何時もこの補充労働グループを効果的に指揮するには大き過ぎる。しかもこの指揮ということは、他人と一諸に働く時に、人間をその価値によって相殺する以上の位置に据える。

ある組が狩りや漁に出掛ける時には、同等の配分が、その役目の如何に拘らず、仲間の間になされる。ケディズは、同等の分配を極端な個人主義の現われで、それを原始的コンミニズムと解するのは間違いだというのは「めいめいの者は自分が貰ったものよりも沢山に与えることを嫌っているからだ」という。それはどうであれ、ランド・ダイヤクス族は実際否共産主義的特徴が著るしく、例えば彼らはその生活の中で利子を認めている。ニューア族の間では、食糧の不足は相互扶助によって癒されているが、ランド・ダイヤクス族の間では利子による。ニューア族とランド・ダイヤクス族の私の記述から、原始共産主義の中の生活である

うとなかろうと、彼らの生活が共同と相互扶助と互惠主義と、そして自然への自由な接近による高度の性格を持っていることがわかるだろう。そしてこれらの性格は又、他の原始社会に關しても真実である。原始社会の無政府的なそして共産主義的な特徴を概括する時、私はレスリィ・ホワイトを引用するより他に良い方法を知らない。

「人力使用地帯の間で発展した社会組織の型は、疑いもなく、人間がかって住んだ中で最も満足のゆく種類の社会的環境であった。だからこの原始社会の制度が、靈長類の願望と必要に最もつりあっていたとわれわれは考える。原始社会では凡ての人は兄弟であり親類であった。凡ての者は自由であった。誰も他人を奴隷にしたり縛ったりする者はなかった。あらゆる人は自由に自然の資源に接近できた。あらゆる人は平等であった。相互扶助は原始社会の性格であった。生産は必要のために行われた。そして人間の権利と安寧は、財産の権利や制度の上位に位置していた。」(L・ホワイト)

(四)

さて、次の節で興味のあることは、国家が廃止され又は衰退した時、その未来のユウトピアの中におけるアナキストやコンミニスト著述家による記述から引き出され得るもの

とである。それ故、私はこれらの著述家に明らかにされたこの種の社会を一見してみたい。ウィリアム・ゴドウィン¹は多分最も早期の組織的なアナキスト思想家であり、社会と国家とははっきり分離した。前者は相互援助のために協力する人間の欲求によって造られたが、後者はわれわれの悪意の生産物であり、最上の場合でも必要悪である。人間がその存在に関して最高の法則を適用する時、しかもそれが一般の安寧に関する時、そこには国家はない。その代りに、普遍的な善意に影響する諸問題は、すべて自由に関与する人の配慮の問題になるだろう。財産は廃止され、生産物は必要に応じて配分されるだろう。

ゴドウィンは当世風の思想家からは、理想家ではないと考えられる。確かに彼は自分が宣言したゴールを現実化するための戦術を計画しなかった。それ故、われわれは、未来への道を知っていると自ら考えていたアナキス達を考慮してみよう。

バクウニンとクロボトキン²は共に進化論者であった。しかも彼らの時代には、かかる進化的思潮傾向は、進歩した意見と考へても驚くには当らなかった。バクウニンにとっては、人間は不完全から完全への進化的存在であった。クロボトキンにとっては、より不幸な存在から幸福な存在への変遷の過程であった。共に彼らは便宜的に、自分達が承認し得なかった社会の様相を、進化の早期の舞台の生産物だと考へた。かくして、国家とそれが制定した法律は消滅するに至る。なぜならば、これらは共に進化の過程を遅滞せしむるから。バクウニンは又、私有財産を低い進化の舞台に属する主要な所有物とみたが、消費物資の中では、私有

財産はそのまま残るだろう。けれどもクロボトキンにとっては、未来社会では、私有財産は、凡てが使用するために自由に利用する結合された財物となつて、共產主義的になるだろう。「人間は、国家がなかったなら、自由に協力して生活するだろう」とクロボトキンはいう。また人間は国家のない社会で共に生活する時にのみ、完全な人間関係が成長するとバクウニンはいう。これが即ち人間社会の成長する方向であるが、二人共に緩慢な進化過程の不足を補う革命の主張者である。実際クロボトキンがはっきりいうように、「革命は進化を加速度的にする」。

さてコンミュニストとしてマルクスやエンゲルスは、近代のアナキストと進化に対する展望を共に分けあっている。そして共に人間進化の向上の障害を取り除くために革命を愛好する。国家はいつも存在していたのではなかった。なぜなら、国家のない社会が厳存していたから。しかし、経済生活が発展し、社会が階級に分裂しはじめた時、国家の形成が必要となった。経済生活が継続的に発展して、何時か、これらの階級の分裂が経済的生産の邪魔となる時が来るだろう。丁度、かつて階級の分裂が国家を存在の中に呼び入れたように。これがたまたま起ってきた時、国家は衰退するだろう。かくて協同に道を譲るだろう。そして、「この協同の中で、各人の自由な発展が万人の自由な発展のための条件となる」(マルクス、エンゲルス、一卷五四)。この新しい社会的存在の中で、「人間の統治は物の管理に置きかえられる」(同二巻一五一)。

未来の理想社会は、過去の原始社会と極めて類似した社会を生み出す。進化の過程において、かつて進化が人間から奪ったと同じような原始社会の形を——たえ技術や科学的意識はその干渉によって大いに進歩していようと——人間にかえす。原始社会の単純な技術は多くの観点からみて、無政府的で共産的な生活方法を必要とした。未来社会の驚くべき強力な技術化は、又、未来の生活にとって必須である。私は理想社会が原始社会の単純な鏡だと提案するつもりはない。それらの違っていることは事実だが、それは程度においてであって種類においてではない。

「政府の民主化、友愛社会、権利と特権の平等、教育の普及は、経験や知恵や知識がうんと役立つ社会では、より一層高い水準に向うことを予見する」と、エンゲルスはその「家族、私有財産、国家の起源」の条りに、モルガンの「古代社会」から引用して証拠立てんとした。それは人を引きつける構想だ。ラジカリストや革命家をばっとさせるヴィジョンだ。

この種の歴史的予見はバクウニンやクロボトキンによってもみられるが、かかる引用をしながらもマルクスやエンゲルスは、官公吏でもあるまいに、当時のロシアに執着していた。しかし最近のその入門書の中では、国家の衰退と、「能力に応じて各人から、必要に応じて各人へ」という原理に基礎づけられた社会への案内が確められている。なおそれ以上にクウシネンは、「共産主義は最も正しい組織である。それは平等と自由の原理を充分に現実化する。人間の人格の発展を確実にする。そして社会を調和した協同と共和政態に変える」と

いっている。

(五)

この論文の初めに、私はアナキストや共産主義著述家の理想的な予言は社会神話であると提議した。それら予言の有用性は今や、ここでは人間の行動に拍車をかける。この未来を予言するこれらの神話から、人類は遙かに遠い過去を映し出す。ニコラス・オルタは、「左翼はユウトピヤから自分達の命を吸収する」と云っている。すこぶる明解だが、理想主義者達は、現実がどんなものであるうとも、原始社会から現実を吸収している。社会神話はそのように行動を鼓舞するか、彼らは歴史を導き得るような引力ある予言をささえる。たとえどんな場所へ彼らを導こうとも、人類は自由、平等、友愛から落下したが、それらは買い戻すことができる。われわれがみたように、社会神話は行動の図式を伴ってより、人をより一層実践にする。未来に対するこの予言は、これらの図式を方法として獲得した信仰者を鼓舞する。革命やゼネストや、その歴史的伝道に対する意識の労働階級の目覚めは、その方への精随的な一歩として、又、新社会の生誕として享受することによってのみあらわになるだろう。

バクウニンやクロボトキンやマルクスやエンゲルス達がなんと考えようと、ユウトピヤン社会主義者や科学的社会主義者がなんと想像しようと、社会神話は決して科学的仮定ではない。しかし、議論の鎖の中に暗に含まれたものは、ある点において、社会神話は実に科学的仮定と平衡して走る理念である。丁度、科学的仮定のもつ有用性のテストの一つが、科学的仮定を鼓舞する探究の効果いかにかかると同じように。私の議論も又、社会神話の有用性の一つのテストに、それが鼓舞する行動の実り多きにある。われわれは、プロレタリアであろうとブルジョアであろうと、われわれの社会に引き起された多くの恵み多き変化を、改革者や革命家によると考えるには及ばない。

社会神話とは原始的過去の単なる反映ではない。それは又、現実の思想を後へ戻すものでもない。われわれは神話の性質を考えることによって、このことを一層よく理解することができる。考古学者マリノフスキは、R・ファースの「チコピヤの伝統と歴史」を読んで、神話を、過去を浮き彫りにした記述、又は単なる知的生産物とみることをやめた。神話の解釈は社会学的なものである。ある社会の神話はナデルがニゲリヤのケエドに関して公示し、ファースがチコピヤに関して開示したように、未開人達の現存する政治組織は、一項目づつ関連せしめ得るイデオロギイである。一つ社会の内のイデオロギイの変化は、ファースが示したように、権力の変移や又異った諸事件への影響に関係している。

この見解によれば、神話とは、未来を浮き彫りにした記録の記述、又は単なる知的生産物

とみるのでなくて、現在の社会学的現実を裏返して反映させたものとみることが出来る。諸君は卒直に思想を記録しないで、この社会で不在にされた諸性質を、鏡に映るように裏返して反映させる。原始社会においては、自由、平等、友愛は現実である。丁度、理想主義者の構想が原始的過去への引き戻しと解されるように、それは又、文明化された現在からの後退と解される。実際、マルクスが宗教的神話に適用した言葉は、極めて近似的に理想主義者達の神話にも適用され得る。

「宗教的な悩みは現実の苦しみの表現であり、同時に現実の苦しみへの抗議であり、宗教は迫害された者達の溜息、心なき世界の心である。それは丁度、冷淡な事態の中の心の火である。それは民衆の阿片である」(マルクス、エンゲルス英訳四二頁)

マルクスの式には賛成できない点が一つある。理想主義者の神話は阿片のようなものではない。その神話は、例えば、ロシアで起ったように、ある国で理想主義者達が勝利を獲た時に、その神話の機能がはじめると私は考える。ラスウェルとカプランはその共著「権力と社会」の中で、「イデオロギイとは社会的構造を保存するための政治的神話である」と云っているが、そのイデオロギイに取って代るものがとりもなおさず「理想」である。

しかしもし、実際、理想が未来社会のモデルを発見するために過去を志向するのでなく、現実には不在な人間の価値を反映するのでもなく、又、現実を激変せしむることの中に未来を志向するのでないならば、私がここで述べた見解を承認することは、理想がまねきよせた

多くのラジカリストや革命家達の精神にとって、我慢がならないものとなる。私の見解は、社会神話から離れて革命を望んでいる人々にとって、とても我慢がならないものであろう。かくして、ゼネストの神話は、共産主義者にとって固執されるだろう。なおつけ加えていえば、来世の神話は宗教家にとって固執されるだろう。

結論として、弱められた同胞に関する社会神話の有用性を認むる一方、固い決意と血気な精神とリアリティに徹する心的態度を携ふこれらの人々に、展望として、このことは一瞥する価値があるようにみえる。

私はみつけることができなかったが、ショウジ・モルナアの引用の中で、バクウニンはかつて「未来を考えることは罪である」と宣言したという。クロボトキンはわれわれの文明の歴史を「権威の伝統と自由の伝統」、即ち二つの相反する伝統の間の斗争と解釈した。彼は、「これら二つの流れの間では、常に人間の斗争は生じた」といった。われわれが彼らの意見を賞めたたえる時、われわれも又、いつも彼らの固い決意に賛同する。そして、ザムヤチンと共に、烈しい終ることなき、避け難い永遠の革命を宣言する。

原始的な過去と理想主義者の未来を底の底まで見通しながら、われわれは現実世界にとどまる。われわれはエネルギー利用度が必然的に低い過去の世界に対する無政府的なそして共産的な様相が、われわれをとらえて社会神話の中へ連れていき、しかもわれわれは、その未来社会がその中で生活する人々にとってどんなであるかを、想像上記述して、未来社会を予

見した。しかもこの社会神話は、現実の批判であり、裏返された現実の反映である。というのは、彼らが過去から映しとった諸性質は、正確にいて、現実において欠けているものだからである。われわれは又、社会神話は人々を行動への拍車としてある有用性を持つことをみた。強い決意を持つ人々には二者選一の哲学があるにしても。モルナアは云っている。

「われわれは、あるグループや制度を除いて、全体としては、社会の中においてではなく、性格として自由を選ぶことができる。しかもいかなる社会の中でも大衆の生活の方法は、この除かれた者の場合でさえも、排外的な性格ではない。同様に、この見解では、一片の自由は常に反対にある。そして自由を守る人々は遵法主義者の圧迫に反抗するだろう。この暗示をうけている者は、最後の勝利の約束なしでも、「永遠の反抗」を続けるものであるが、世の中には、諸君の主人を信じないし、諸君の解放者を信じないし又、この世界を自由のために安定させようとする意志のない者もあるのである。」(モルナア)

私はモルナアほど厭世的でない、というのは、自由、平等、友愛の方向へ、モルガンやホワイท์がほめたたえたように、よろめく足を一步一步踏み出して行くことができるからである。しかし、われわれは現在に生きている、しかも「未来について考えることは罪である。」